資料１

第四次愛知県教育振興基本計画（仮称）　骨子案について

１　策定の趣旨

○　現行計画である「あいちの教育ビジョン２０２０ -第三次愛知県教育振興基本計画-」（2016 年２月策定）の計画期間が 2020 年度までであることから、第四次愛知県教育振興基本計画（仮称）を策定する。

○　次期計画の策定に当たっては、現行計画の基本理念を継承しつつ、新たな課題や今後育むことが求められる力の育成を図る。

○　現行計画と同様に、教育に関する大綱との整合性を図る。

２　計画の性格

○　教育基本法第十七条第２項に規定する教育振興基本計画

○　この計画における目標や基本的な方針の部分を、地方教育行政の組織及び運営に関する法律第一条の三に規定する「大綱」とする。

３　計画期間

２０２１（令和３）年度から２０２５（令和７）年度までの５年間

骨子案策定のポイント

○　現行計画に引き続き、多様性の尊重、命を大切にする心や健やかな体の育成、確かな学力を身につけさせることをめざす。

○　高度情報化の進展や外国人児童生徒の増加など、急速な社会の変化に対応したものとする。

○　新型コロナウイルス感染症により生じた社会の変化を見据え、子どもたちが、今後どのように社会が変化しても、自らの力で、たくましく生きていくことができることをめざす。

◇今後求められる取組

《重点事項》

・ＩＣＴ教育の推進　　・外国人児童生徒への教育　　・学校における働き方改革

《上記の他に求められる主な取組》

・県立高校の魅力向上　　・特別支援教育　　・入試制度改革

・新学習指導要領の定着（アクティブ・ラーニング、プログラミング教育、外国語教育、道徳教育等）　等

《重点事項》については、「取組の柱と施策の展開」に、位置づける。

第四次愛知県教育振興基本計画（仮称）の骨子案

	現行計画（第三次教育振興基本計画）	第四次教育振興基本計画における骨子案
４ 基本理念	「自らを高めること」と**「社会に役立つこと」**を基本的視点とした**「あいちの人間像」**の実現	○「基本理念」については、おおむね現行計画の基本理念を継承する。 ○「基本理念」と「めざす『あいちの人間像』」を合わせて、「めざす『あいちの教育』の姿」とし、以下のとおりにした。 **「めざす『あいちの教育』の姿」** 「自らを高めること」と**「社会の担い手となること」**を基本に、かけがえのない生命や多様な価値観を尊重して、社会のつながりの中でお互いのよさを生かし合える資質を養い、健やかな心と体を育て、主体的に学んで自らを高め、自分らしさを社会に生かすことのできる人を育む。
５ めざす「あいちの人間像」	**【共に生きる】** 自他の命を大切にし、多様な人々の存在を尊重して生きることのできる人間 **【自分を生かす】** 互いに切磋琢磨し、自らの力を社会に生かすことのできる人間 **【学び続ける】** 生涯にわたって健やかな体と心をつちかい、学び続けることのできる人間 **【あいちを創る】** あいちの伝統と文化、「ものづくりの精神」を継承し、新たな価値を生み出すことのできる人間 **【世界にはばたく】** 次代を展望し、世界に視野を広げ活動することのできる人間	**※見直しの視点** ◇「社会に役立つこと」は、平成 18 年「あいちの教育を考える懇談会」後に報告された、「社会で役立つための意欲・力」から採用された。しかし、「役立つ」という表現が即物的なイメージをもたれることがあるため、「誰もが担い手となり、ともに社会を築いていく」という、共生的な表現である「社会の担い手となること」にした。 ◇「めざす「あいちの人間像」は、一定の型にはめ込むような印象を持たれる恐れがある。」「『基本理念』『めざす「あいちの人間像」』『基本的な取組の方向』の関係がわかりにくい。」との意見があった。そこで、基本理念と人間像を合わせて、「めざす『あいちの教育』の姿」とし、それを具現化するための「基本的な取組の方向」という位置づけにした。 ◇「めざす姿」は、「生命、多様性の尊重」「連帯、共生の精神」「豊かな人間性」「自ら学ぶ姿勢」「社会への貢献」を掲げ、未来を拓く「生きる力」をもつ人を育むとした。

（委員からのご意見）

「自らを高めること」「社会に役立つこと」について

○「自らを高めること」「社会に役立つこと」の２点は時代が変化しても揺るがないもの。継承、踏襲し、より実効性のあるものにしていく必要がある。

○「社会に役立つこと」は、国の教育振興計画のように「社会の担い手となること」という表現に変えてはどうか？「役立つ人」「役立たない人」のレッテル貼り的な見方をされる危険性もあるので。

○「自らを高めること」「社会に役立つこと」は大切な理念だが、時代を超えた普遍性があるかは、再検討する必要がある。自らを高めようとする個人の努力を互いに支え合うような社会の実現にむけた教育の理念が、今日には求められている。

「あいちの人間像」について

○「あいちの人間像」という表現に違和感がある。県ごとに、違う人間像があるのだろうか。「教育の目標」「教育がめざす姿」等、普通の表現でよい。

○学校現場でも、「めざす児童・生徒像」と使う。型にはめるというとらえではなく、あるべき姿、ありたい姿ととらえるのなら、「人間像」でよい。が、よりよい表現があれば変更してもよい。

（委員からのご意見）

【共に生きる】自他の命を大切にし、多様な人々の存在を尊重して生きることのできる人間

○　国籍の違い、文化や生活習慣の違い、障害の有無、性別等による差別を許さないというメッセージを含めたい。

○　歴史的に言えば、感染症の流行のたびに差別の問題が惹起してきた。様々な課題を自らの問題としてとらえさせることが、差別の解消をはかることにつながる。

【自分を生かす】互いに切磋琢磨し、自らの力を社会に生かすことのできる人間

○　「切磋琢磨」、「自らの力を社会に生かす」というのは見直したほうが良い。「切磋琢磨」だけでは、競争的な関係が強調される。「自らの力を社会に生かす」では、社会の存在を個人の存在の前提としつつ、所与の社会に対して受身的に貢献することが求められているように感じる。「互いの良さを生かしあって、よりよい社会の創造を求めて前向きに生きることのできる人間」としてはどうか。

○　「協働」という言葉を明確に入れることはできないか。

○　「切磋琢磨」に含まれているかもしれないが、「協力し」あってという言葉を入れたい。これからの社会では、つながり・連携・協働の中で個々の力を生かすことが重要になってくる。子どもたちも親、おとなも、孤立していることが問題を生み出していると感じている。

【学び続ける】生涯にわたって健やかな体と心をつちかい、学び続けることのできる人間

○　「・・・体と心をつちかい・・・」では、違和感を感じる。「体と心を育み・・・」が良いと思う。

○　障害の重い方々の実態を踏まえると、「健やかな体」という表現に違和感を覚える。一方、健常な方々には、「体力づくり」「体力向上の推進」等は重要な取組となる。悩ましいところである。

○　「生涯学習」の観点は適当。一方、受験学力こそが価値を生み出すという一元的な価値観が存在している。学びの意味や有用性を感じられる教育が求められる。

【あいちを創る】あいちの伝統と文化、「ものづくりの精神」を継承し、新たな価値を生み出すことのできる人間

○　この文言の一部に「ものづくり」に携わらない人々に疎外感を与えるというような「型はめ」を感じる。補足解説を読めば「ものづくり」に直接携わるのではなく、その「精神」を継承することだと理解できるが、すべての受け手がそこまで読み込むとは思えず、ぱっと読んで誤解がないようにしたい。

○　「ものづくりの精神」の継承との文脈で、インターンシップやキャリア教育の充実が図られると思われる。「マナー習得」「体験活動」だけに偏ることなく、広い意味での「将来への準備教育」ととらえたい。特に「権利としてのキャリア教育」を付け加えたい。労働法など「働くルール」を学ぶ機会が現状では少ない。

○「ものづくりの精神」が、「製造業に就くための心構え」という一部の業種・作業を指しているように狭く捉えられないかと懸念する。

【世界にはばたく】次代を展望し、世界に視野を広げ活動することのできる人間

○　世界をまたにかけて愛知県内で活躍する人間をめざすのが本計画の趣旨に合うと思う。そのように考えると、「はばたく」より「輝く」の方がよりよい。

○　コロナ禍で、学びの場にも働く場にも変化が現れている。どこにいても学び、働くことができる時代になりつつある。ますます世界とつながることが容易になってきたことを記述してはどうか。

○　ここでの「世界」が、外国・海外を示しているようだと、数十年前の国際化施策のように感じる。現代はインターネットに代表されるような、国境のないグローバル社会であることから、「日本から世界へ」ではなく、「日本も世界の中の一つであり、日本で活躍すること＝世界・地球で活躍することである」と認識を改める必要がある。またそれによって、海外から日本に来て学ぶ子どもたちが日本で活躍することも含まれると思う。

６　基本的な取組の方向

現行計画（第三次教育振興基本計画）

(1) 個に応じたきめ細かな教育を充実させ、一人一人の個性や可能性を伸ばします

(2) 人としての在り方・生き方を考える教育を充実させ、道徳性・社会性を育みます

(3) 健やかな体と心を育む教育を充実させ、たくましく生きる力を育みます

(4) 未来への学びを充実させ、あいちを担う人材を育成します

(5) 学びがいのある魅力的な教育環境づくりを進めます

第四次教育振興基本計画における骨子案

○「めざす『あいちの教育』の姿」の実現や現状の問題点を考慮して、基本的な取組の方向の枠組みは維持しつつ、表現を修正するとともに、新たな項目を追加する。

(1) 個に応じたきめ細かな教育を充実させ、生涯にわたって、たくましく生きる力を育みます

(2) 自ら学びに向かう教育を充実させ、自己の可能性を伸ばし続ける姿勢を育みます

(3) 人としての在り方・生き方を考える教育を充実させ、実践力を伴った道徳性・社会性を育みます

(4) ふるさとの魅力や可能性、愛知の伝統文化に学びつつ技術の進歩に取り組み、社会の発展を支える人材を育成します

(5) 世界とつながり、生き生きと活躍する人材を育成します

(6) 子供の意欲を高め、教師の働きがいがある魅力的な教育環境づくりを進めます

(7) 大規模災害や感染症拡大等の緊急時においても、子供たちが安心・安全に学べることを保障します（新規）

※見直しの視点

◇(4) (5)は、現行の「あいちの人間像」をもとに作成。

◇(1) 一人一人に寄り添う丁寧な教育が、人生を生き抜く人間力を育くむことを願い、「生涯にわたって」を加えた。

◇(2)「主体的であること」「学びに向かう力」を意識し、さらに、生涯にわたって学び、いつどんなときも自分を高めていく態度・姿勢の大切さを強調した。

◇(3) これまでどおり道徳性・社会性を育み、さらに、行動にも反映できることをめざして、「実践力を伴った」を加えた。

◇(4)「あいちを担う」を、より広く「社会の発展を支える」に変更した。

◇(5)「生き生きと」を加え、自らの前向きな活躍が、世界で認められるような人材の育成を表した。

◇(6) 学ぶ側にも教師にも魅力的な環境であるよう、「意欲を高め」と「働きがい」を加えた。

◇(7) 緊急時における対応とそうした時にも学びを保障する、県の姿勢を表した。

（委員からのご意見）

○基本理念との対応関係がよくわかりません。

○学び合いの視点が弱いと感じる。「仲間と共に育ち合う」ことを加えるのが良いと考える。

○「ICT 教育の促進」が検討される中、ICT のみならず他項目についても「先進的な」取組みを盛り込むべきではないか。

○５　学びがいのある　→　学びがいがある、働き甲斐があるへ。「次代を担う教職員の確保」について、大きく扱われるようにすべき。

７　基本的な取組を推進するに当たっての四つの視点

現行計画（第三次教育振興基本計画）

(1) 生きる力を育む家庭・地域・学校の取組の連携強化
(2) 学校種・学校設置者の枠を越えた学びの連続性の重視
(3) 教育委員会・首長部局・関係機関相互の連携
(4) 国籍・言葉・文化等の違いを越えた多様性の尊重

第四次教育振興基本計画における骨子案

○　現行計画では、施策が効果的に行われるためのポイントとして、(1) ～ (4) の四つの視点を定めていたが、「社会全体で教育を進めていくこと」という流れの中で、これらは必須のものとなっている。そこで、「視点」として取り出して扱うことはせず、留意点として「第２章 取組の柱と施策の展開」の冒頭に、以下のとおり書き入れることとする。

文　例

「めざす『あいちの教育』の姿」を実現するためには、「社会全体で教育を進めていくこと」が大切です。

具体的には、家庭、地域、学校の三者が、それぞれの役割を果たしつつ、協働することは子供の育ちには欠かせません。また、探究活動やキャリア教育がよい例ですが、子供の自在な活動や豊かな学びのためには、学校、公共団体、産業界、経済団体、大学、ＮＰＯ等の枠にとらわれない協力が求められます。

もちろん、「持続可能な社会にも有益な取組である」「誰一人取り残さない取組である」ことで、より多くの協働が得られることは言うまでもありません。

七つの基本的な取組の方向のもとに施策を展開していくとき、取組を有効に働かせ、成果が上げられるように、様々な人たちの「協働」に留意して進めます。

（委員からのご意見）

○「基本理念」と「取組みの方向」と「四つの視点」との関係性がよくわかりません。「四つの視点」のうち、(1)～(3)は連携体制の構築の話で、(4)だけが理念と重なっているように思う。

○（１）～（３）までの視点に記述されている項目は、実践の方向性や手段レベルも彷彿とさせる表現となっている。一方で、（４）については「すべての県民が努力していく必要性」という表現に留まっている。誰がどのように実践するかのイメージをより明らかに記述すべきではないか。

○これまでの教育振興基本計画で使われてきた「家庭・地域・学校の協働」という表現は，学校が協働する範囲を，家庭と地域社会として捉えてきたのだと思う。しかし、新型コロナ感染症への対応等を見れば，社会全体や世界を，それぞれの学校を取り巻く環境として考える必要があるように思う。「家庭・地域・学校の協働」という表現は学校回りの小さな閉じられた世界に感じられる。

このところ産業界も含めた幅広いところでＳＤＧｓをキーワードにして活動が行われている。教育振興基本計画の目標群をＳＤＧｓという切り口でも捉えられるよう配慮していく必要があると思う。